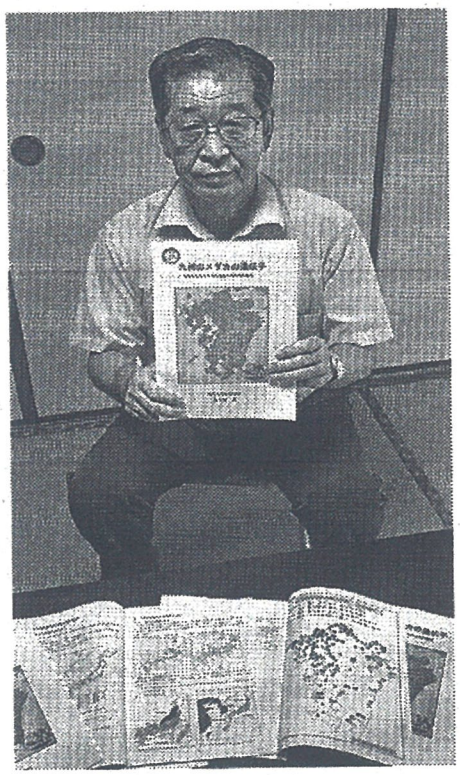
西日本新聞

メダカ遺伝子 九州全県調査

福岡市の元小学校長・与小田さん

九州各地に生息するメダカの遺伝子について、福岡市西区の元小学校長、与小田寛さん(66)が生息地域によって異なることを紹介する冊子を作成した。メダカは環境省の絶滅危惧種に指定されており、与小田さんによると、安易な放流で遺伝子が異なるメダカが混在し、生態系の変化や生息数減の要因になる可能性もあるという。「故郷のメダカを守るきっかけになれば」と話す。



九州のメダカの遺伝子を冊子にまとめた与小田寛さん

「地域差」突き止め、冊子に

与小田さんは早良区の有住小に校長として着任した2002年、糸島市で採集したメダカを育て、室見川に放流する活動を始めた。知識を増やそうと、校長室でも飼育。「子どもの喜ぶ顔を見るのがうれしくて」07年に参加したシンポジウムで、メダカの遺伝子が地域で異なることを知り、関心が沸いた。その後6年かけて九州全県の田園地帯を巡り、計175カ所で集めた1800匹を、メダカの遺伝子研究で知られる新潟大に送った。

その結果、県内のほとんどの遺伝子型は「B15」。長崎「B23」、熊本「B26」が多いと判明。ちなみに福岡都市圏でも福岡平野は「B15」だが、糸島市「B17」、福岡市西区今津「B55」という。「放流時の参考にしてもらえれば」と与小田さん。A4サイズ、32ページ。与小田さん＝092（807）9251。

（浜口妙華）